

大学院看護学研究科看護学専攻	
学籍番号	DN 1 5 0 3
氏 名	西岡 啓子
学位の種類	博士（看護学）
学位授与年月日	2020 年 3 月 16 日
学位授与の要件	学位規程第 4 条第 2 項該当
論文題目	生殖補助医療を受療する場における女性の体験
主指導教員	成田 伸 教授
副指導教員	本田 芳香 教授
	永井 優子 教授
論文審査委員	主査： 横山 由美 教授
	副査： 小原 泉 教授
	副査： 成田 伸 教授

最終試験の結果の要旨

1. 研究テーマの目的の明確性および広域実践看護学分野の目的との適合性

本研究は生殖補助医療（以下 ART とする）を受療する女性の受療の場での体験を明らかにし、その場における看護支援を検討することであり、目的は明確である。本研究で明らかにした ART を「受療する場」での女性の体験は、その場に携わる看護師の実践に寄与するだけでなく、看護職が居ない ART の場においても、体制整備を検討する資料となり、広域実践看護学分野の目的と適合している。

2. 研究の独創性・革新性

本研究は、ART を受療する場での女性の体験を表したものであり、受療の場は妊娠の可否が分かる場でもあり、ART を受療する女性にとっては大きな出来事を体験する場である。これまで ART を受療する女性の体験は研究されていたものの、受療の場での体験を表したものはなく、本研究は独創性がある。また、本研究の対象施設では ART の場に看護職が常駐していたが、多くの ART の場には看護職が居ないことが明確であり、そのような場においても支援体制を検討していける資料となり、革新性がある。

3. 実践的意義、社会的意義

本研究は、ART を受療する女性への具体的な看護支援および支援体制を検討する資料となり、実践的意義がある。また、我が国における晩婚・晩産化、少子化などの社会情勢から不妊治療を受ける女性の増加と支援は必至であり、本研究は支援の方向性を検討する資料ともなり、社会的意義がある。

4. 研究方法の妥当性

ART を受療する女性の受療の場での参加観察後に、半構造化面接を行い、両者のデータ合わせて研究データとして作成し、類似性、相違性に基づきカテゴリを生成していった質的記述的デザインである。本研究では、受療の場における女性の体験を表すことを目的としているため、受療の場でのイベントに参加観察し、半構造化面接においてそのイベントを女性がどのように意味付けしているのかを表すには適切な研究デザインである。また、一回のみの観察ではなく、複数回の参加観察や構造化面接を行うことは、体験を表すための深いデータを得るために妥当な研究方法である。しかし、論文審査においてカテゴリ生成方法について見直しの必要性が指摘され修正を行ったが、最終試験においてもカテゴリ名において表現の修正の必要性が指摘された。カテゴリ名については幾分考慮の余地はあるものの最終論文では概ね修正がされた。

5. 引用文献の適切性

国内・国外の文献を幅広く、また制度的変化やシステムも視野に入れ十分な文献が引用されており、引用文献は適切である。

6. 論文の体系、論旨の一貫性

体験を明らかにするために、受療の場における参加観察によるデータとその場での出来事に対する対象者への半構造化面接を行い、出来事の対象者にとっての意味付けを明確にして、体験として表している。また妊娠に至らない出来事をストレスのジェットコースターとして捉え、その出来事が起こる受療の場に焦点をあてることによって、枠組みを明確にしている。1月6日の論文審査ではその要となる「受療の場」の用語の定義が枠組みとは齟齬がある表現となっていたため修正を求め、1月24日の再審査では概ね修正がされた。2月18日の最終試験においては、再度「受療の場」についての用語の定義およびカテゴリ名について見直しの必要性が指摘された。最終論文において「受療の場」と論文テーマおよび目的・結果・考察の一貫性が保たれていることが確認された。カテゴリ名についても再修正が行われた。まだ幾分考慮の余地のあるものが散見されるが、最終論文では概ね修正が行われた。また、論文審査において、考察については結果に即した具体的な示唆を提案できるよう指摘を求め、最終試験では具体的な示唆が示されたが、最終試験で結果との関連性が見えにくいという指摘を受けた。最終論文では結果のカテゴリを受けての考察が示された。

以上、学位論文の審査基準は満たしていることから、最終試験は合格と判定した。